

主婦と職人のあいだ——手工芸は手芸か、工芸か？

ハンドイクラフト

中谷 文美 なみたに あやみ
岡山大学教授



パリの農村で毎朝立つ市場に集まる女性たち。洋装の女性が増えているが、年配者を中心に、昔ながらの腰布姿も混じる。だが、身につけるのは安物のパティックが多い。日常着用の布を自ら織ることはもはやない

「手工芸品」についてまわる「女性の手仕事」というイメージ。女性が家事や育児の合間を縫ってするものという先入観が、その労働に対する正当な評価をさまたげている。

アジア雑貨が喚起するノスタルジア

一九九〇年代後半〜二〇〇〇年代にかけて、「アジア雑貨」が日本の女性誌や通販カタログなどに頻繁に取り上げられた時期がある。なかでも伝統的な技法による染織品に注目が集まり、全国のあちこちで展示即売会が開かれもした。そういう場面で紹介される布は、製作背景にある「物語」とセットで語られ、しばしば「家族の幸せを願う心」「丹念な手仕事」といった表現で彩られていた。それらのことが喚起するのは、伝統社会の女性たちが家族の日常づかいの布製作のために時間と労力を注ぐ姿であり、自給自足的な手仕事の文化に対するノスタルジックな感情である。

じつのところ、世界各地の布づくりの現場の大半は、自給自足の文脈を離れてしまっている。もともと布は、古くから重要

中断と再開が容易な作業だと思われたからだ。

つまり、家事や育児など、家庭内責任と両立しやすい形で収入に結びつく活動に女性が従事する方法を模索した結果が、手工芸製作の奨励だった。そこで染織品に加えてかご細工、レース編みなど、さまざまな商品開発がおこなわれ、地元市場ばかりでなく、観光客向けの土産物として、あるいはフェアトレード商品として、世界市場で販売されるようになった。

手工芸品づくりは主婦の暇つぶし？

例えば、ドイツの社会学者マリア・ミースが報告している、インド南東部のレース産業の例を見てみよう。ここではキリスト教宣教師が持ち込んだレース編みが欧米市場向けの輸出産業として定着する一方、それまで戸外のレンガ造りや水路工事などの肉体労働に就いていた女性たちが、主婦として家にとどまる選択をするようになっていた。とはいえ夫の収入だけで生計を立てることは難しかったため、妻たちは一日六時間〜八時間もレース編みに費やすことになった。しかし、彼女たちの工賃は非常に低く抑えられ、また家のなかで家事と並行しておこなうという作業の特性から、まともな労働としての評価は与えられなかった。主

婦の暇つぶしというレッテルを貼られていたのである。

わたしが一九九〇年代から調査しているインドネシア、バリ島のある地域の場合、日常着の自家生産は、ずっと前に途絶えた。他方、晴れ着の一部として用いられる豪華な布の生産は村の経済を支えるまでの産業に成長した。屋敷のなかで朝から晩まで機を織る女性たちは、自分たちを主婦とはよばなかった。職業は？ と聞くと、織り職人だと答える。だが、この地域に何度も足を運び、ここで織られる布を素材としたファッションを発表しているジャカルタ在住のデザイナーは「あの人たちの生活スタイルは、職人というより主婦だね」とあつ



バリ東部の農村で、儀礼用の伝統衣装に用いられる紋織を織る女性。自分の寝室のなかや、その前に張り出したテラスに機を置いている人が多い。ほかの用事で忙しく、機織りに時間が割けない時期は、機を簡単に分解して片づけられるようになっている

な交易品でもあった。その生産には地域間分業や技術改良、地域外からの影響による素材や文様の変化などがつきものである。

「開発と女性」プロジェクトが奨励した手工芸品製作

そして二〇世紀に入ってから、いっそう空間的・文化的隔たりの大きい市場に向けた商品生産が本格化し、政府による振興策や国際機関、地元のNGOなどによる介入も活発になった。世界的に展開された「開発と女性」(Women in Development: WID)プログラムが、開発途上国の農村に暮らす女性向けの収入創出手段として、手工芸品(ハンドイクラフト)製作を重視したことも背景要因のひとつである。手工芸品をつくるにあたっては、大がかりな道具と高度な技術訓練を必要とせず、家のなかででき、



村内の小売店で売られている紋織。婚礼や成人儀礼、大学の卒業式など、とくに晴れがましい機会に身につける伝統衣装の一部として、都市住民が買い求める。最近では首都ジャカルタからの注文も増えた

さり言う。家事や育児の合間を縫って機に向かう様子を見てのことらしい。

手芸なるものが趣味の領域に置かれ、その作品が直接市場に出ていくことは少ないのに対し、工芸品はプロの職人の手で、売るために作られる。その意味では、インドやインドネシアの農村女性たちが生計戦略の一環として従事する布製作は、趣味のものづくりとは一線を画したものであり、彼女たちははっきりとした職人といえる。ところが、家庭内での「女性の手仕事」という位置づけが、その労働を経済的にも社会的にも正当な評価から遠ざけている。わたしたちがアジア産の布を「素朴」「ぬくもり」「懐かしさ」ということばで飾ってしまうのも、そういうまなざしのなせる業かもしれない。